



残照～街を撫でる静かな風を月が見ていた

油彩会員 福原幸喜

第16回 道展U21講評 「他の誰でもない自分という表現」

版画会員 審査委員長 小林 大



16回目を迎えた道展U21です。今年の応募作品は、平面が805点、立体作品が69点（過去最高数）で総数が874点でした。審査員は21名で厳正に行われ票を多く獲得したものを優秀賞とし、その中から各賞が決まりました。

エントリーされた皆さんはまぎれもなく芸術家です。勉強やクラブ活動などの時間的制約がある中で、自分を見つめ、考えたことに情熱を持って表現したのですから。

思うように行かず残念ながら完成に至らなかったものもあったかも知れません。しかし優秀賞にならなかったとってがっかりすることはありません。私一人だけが一票を投じた作品がありました。私はその作品の中にいいものを見つけたと思いましたので、個人的に優秀賞を差し上げたいくらいの気持ちで挙手したのです。そのような票が入選作には入っているのです。

講評会で、私は幸運にもその作者と話すことができました。私は独創的な視点、挑戦性がすごいという感想を伝えました。他の誰でもない自分という表現が素晴らしいと思いました。

必ずしも本人には伝わらない声もありますが、作品は人とのコミュニケーションを生むものだとして信じて下さい。

大賞を受賞した平井鴻之介さん（札幌大谷高等学校）の「ジロの懸念」は立体作品です。拾った松ぼっくりからアルマジロの甲羅を思い浮かんだといいます。なんとという発想力でしょう。しかし彼のすごいところは思いつきでは終わらせなかったことでした。大変な労力を費やして完成させた満足度は計り知れませんね。迫力満点の造形となりました。



準大賞の白鳥桃歌さん（札幌大谷高等学校）の「命の輪郭」は平面作品です。生命力の象徴である自分と骨格だけの動物たちの対比で命を見つめた佳作だと思います。

今回のU21は全体的にテーマがわかりやすく好感が持った作品が多かったように思います。

U21の展示会場で、同じ世代の作品を観ることによって他者の視点を知ることになるでしょう。その時に自分の中にあるものとならないものに気づかされます。（何も感じないということはありません。感性がない人になりますから。）いろいろなテーマがあることに驚き、共感したり、反発したものが糧になって次のアイデアが生まれます。

今回1回限りで制作はもう十分と思った人でも、思い直すことがあります。いつか再び制作に取りかかる時、このU21が自分自身のアートの原点になってくれるはずですよ。

感性を磨いて自分の才能を見つけて下さい。何かに迷ったらその原点に立ち戻って何度でもやり直せばよいのです。失敗からでも何かを教わるので恐れることはありません。

そして作品ができたら自分だけで楽しまずに発表しましょう。それは作品が持つ使命だと言えるからです。

道展は、若い感性が自由に試される場であり続けたいと思っています。



第16回 道展 U21大賞
札幌大谷高等学校 平井鴻之介

6月、光星緑地でまつぼっくりを拾ったとき、何か作品ができるような気がした。はね一つ一つが動物の甲羅に似ているので、甲羅のある動物を作りたいと思った。まつぼっくりを拾い終わる頃、ほくは悩みが多かった。悩みを抹殺してくれる存在が欲しいと思った。アルマジロは、硬い甲羅で身を守るので、悩みをはねのけてくれそうな気がした。以上が、ジロの誕生秘話でした。

制作を始めたのは去年の大晦日で、ほとんど家にて作業をしました。リビングをアトリエとして使わせてくれた家族に感謝です。

完成して学校へ父の車で搬送してもらう時、連日の雪でかなり道が悪かった。かなりドテドテと揺れた。ジロがミシミシと唸るたび、緊張が走った。ほくは死ぬな死ぬなどと祈っていました。壊れるのではなく、死ぬなと自然に願っていたんです。作品というよりは、いつのまにか家族のように感じていたのかもしれない。それだけ、心から自分が作りたいものを造れたということだと思います。

あらためて、制作を支えてくれた家族、先生、友達、そしてジロを選んでくれた審査員方々に感謝です。



第16回 道展 U21大賞
ジロの懸念

札幌大谷高等学校
平井鴻之介



第16回 道展 U21準大賞
命の輪郭

札幌大谷高等学校
白鳥 桃歌

第99回道展
会友賞・新会友
受賞者の

ことば

●会友賞

日本画 中居 瀧晟

日本画と56年の付き合いと成りますが、30代で挫折し筆を折ったが、凝りもなく、再筆して10年と成りました。今の挑戦は日本画材による徹底ボカシを駆使し、発色の融合に挑戦しておりますが…？ 今後も恥ずかしくない作品制作に励みたいと思っております。

日本画 内崎さき子

凍り付く透明な空気や雪の生命力に惹かれ、スケッチを重ねてきました。炭坑街の面影やポタ山が残る歌志内の冬の暮らしを、もみ紙の技法を使って表現しました。日本画を始めて53年、これを機に勧められ、札幌で4月に個展を開催することができました。

油彩 飯田由美子

凍てついた大地に春の日射しが差し込むとき、心は夢と希望に変わります。

自然と融合させ、身近なモチーフを題材に、思いを鳥に託して心象風景を詩的に表現できればと思います。

油彩 高間 恭子

歳を重ねると想定外の事が多くなってきた。絵を辞めようかと思ったこともあったが、今は辞めなくて良かったと思える。描く事は心の自己治療となっている。絵を通じての友達も沢山できた。マイペースで描き続けて行きたい。

油彩 照井まゆみ

迷い続けて描く中でようやく方向性が見えてきた気がしています。今回も想いを乗せた空気の動きを描きました。彼方からの穏やかで優しく少し寂しい流れ。その想いを感じ取った瞬間をイメージしながら描きました。今後の課題は人物のデフォルメです。難しいです。

油彩 橋詰 博

今言えるのは、受賞の名に恥じぬよう精進していきたいということだけです。実は原稿の依頼を受けても直ちに言葉が出てきませんでした。おそらく人に言えるような確かなものが薄かったからかなと。あらためて制作に向かう自身の姿勢等を顧みる機会になりました。

油彩 大石 春夫

農業の傍ら絵を描いています。農家目線で見た風景を描くよう心がけています。今回の作品は、うちの畑のすぐの裏山です。モチーフ探しには全然困りません。田舎に住んでいてほんとはよかったです。90歳までは、大丈夫かな。

油彩 松木 敦子

今年は春が早そうです。賑やかだった餌台に鳥の姿はなく、静かになりました。殺風景だった庭に、鳥たちが運んだ種が根付き、良い雰囲気の木々が育ちました。数年後、ここが森になることを確信しています。そうなったら、その景色を描くのが私の夢です。

油彩 鈴木 秋弘

道展には関係者ならびに鑑賞者の皆様に評価されますので作品を完成させるのに力が入ります。また、道展へ足を運ぶ時は出品者の皆さんの作品を鑑賞するのを楽しみにし、今後の作品づくりに生かしています。絵を描く機会が増えましたので毎日が充実しています。

水彩 久野 省司

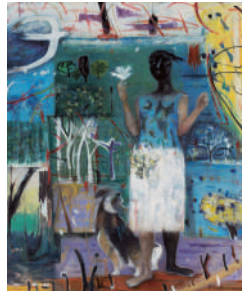
これまでの人生において、作品制作への情熱は、いつも私を支え続けてくれました。私の転換点であり、今ではテーマともなった「湿原」ですが、こ



会友賞 中居 凜晟
しづげん うた
湿原の詩



会友賞 内崎 さき子
冬ごもり



会友賞 飯田由美子
「夏をよぶ鳥」



会友賞 高間 恭子
16才の君



会友賞 照井まゆみ
彼方から



会友賞 橋詰 博
優しさが僕を強くしてくれた



会友賞 大石 春夫
季節のない山



会友賞 松木 敦子
秋思



会友賞 鈴木 秋弘
製鉄路—光と影—



会友賞 久野 省司
湿原の早春Ⅲ

れからも湿原の四季の移ろいを通じ、雄大な自然の素晴らしさを伝えることができればと思っております。

版画 大泉 力也

版を重ねることは言葉を重ねること。99回積み重ねてきた想いに私もさらに重ねて。

版画 外川 篤司

シルクスクリーン版画を始めて30数年経過。初めて製版し、刷った時の感覚は今でも忘れません。今は学生の時のように自由に制作できませんが、自宅にある限られたスペース、道具、季節の中で「制約から生まれる何か」を求め、試行錯誤、右往左往しています。

彫刻 菱野 亮子

閃きのような、自分の感覚をストレートに出しながらも、一瞬の光よりもより確かにそこにある力強さやしなやかさを感じてほしいという思いから作品タイトルをつけました。私自身も「閃角(ひらめくツノ)」を心に抱いて、これからも制作に励みたいと思います。

彫刻 後藤 英子

世の中デジタル化が進み、スマホの操作をはじめ日々戸惑うことが多くなった。変化の波に乗り切れない苛立ちを逆に今の自分を投影、立体化し

た。鏡の老いた自分と対峙して思うことは、“時の経過の重み”。改めて今この一時一時を味わい尽そうと思う。

工芸 田中 栄子

今回工夫した点は、地白を広く多くし、染色後、藍の生葉染を加えて、日陰の葉を表現したことです。次年度は、別の技法で地白にすることを教えて頂いたので挑戦です。藍染は重労働で大変ですが、ワクワクドキドキしながら楽しみたいと思います。

工芸 宮前 和希

手仕事から生まれる造形の美しい線やフォルムの探求、粘土と釉薬の組み合わせや炎によって変化する発色、窯出しの喜びや達成感を味わいながら、試行錯誤して楽しく作陶に取り組んでいます。今年迎える第100回道展に向けて構想を巡らせています。

●会友賞・新会員

油彩 草刈喜一郎

外に出れなくなってモチーフを探すのに苦労して居る。写真から頭で考へて描いた。現場で見る自然をそのまま描くだけの私にはこんな描き方は悲しいが絵も一種の作り物であるから頭で考へて描こうが眼で見て描こうと出来た絵は作品と呼ぶのだからそれでいいか。

●新会友

油彩 城内つぶら

この度は名誉ある新会友にご推挙賜り、ありがとうございます。本作はこれまでの学業の集大成として取り組み、研鑽の成果を形にすることができたと自負しております。2026年度をもちまして大学を卒業いたしますが、今後の制作活動にも注視して下さると幸いです。

油彩 田澤 栄二

私は退職して10余年、仕事で全道各所を廻りました。助手席には、スケッチブック、水彩ペン、カメラが、途中風景等を取材しました。時が経て再訪するも見え方が変わったのか？ 筆が止まり習作に終る事もしばしば、今だ道半ばですが、今日も画布に向かっています。

油彩 丸山 裕也

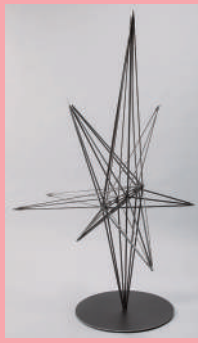
「狂愛夜行」はアダムとイブ、フラミンゴ、象など愛に関係するモチーフが行進している絵で、今までよりも特に曲線を多用し歪んだ禍々しい愛を表現しました。これからは、今まで以上に思想を深化させ、道展の会友に恥じぬような絵を描き続けていきます。



会友賞 大泉 力也
memory lane



抽出
会友賞 外川 篤司



会友賞 閃角
菱野 亮子



会友賞 戸惑い
後藤 英子



会友賞 田中 栄子
光に向かって



会友賞 宮前 和希
悠久



会友賞・新会員 草刈喜一郎
2018. U市役所の裏で



新会友 岬へ
田澤 栄二



新会友 華やぐ秋
益満 伸子



新会友 晴朗回顧
城内つばら



新会友 狂愛夜行
丸山 裕也



新会友 リフレクトⅡ
太田 行子



新会友 誉平焼 (フジュールの壺)
石井 雅子

水彩 益満 伸子

旭岳姿見の池付近には何度も通っていますが、今回は初めてこの景色を一人占めにしていると感じ、山を眺めながら幸せをかみしめました。みぞれで視界が悪い時間もありましたが、やがて晴れ、下山中に目に入った黄色い草原が今回の絵になりました。

水彩 太田 行子

一番苦手だったのが、自分の思っている事を表現することだった。絵を描く事でそれが少しずつ解放されこわばりが溶けてきたように感じます。作品は自分の内在する姿だと思っていますが、私自身を見つめ直し少し励みながら、作品につなげて行きたいと思います。

工芸 石井 雅子

地元中川町で窯を開設して昨年20周年記念祭をし、多くの町民の皆様に来て頂きました。又道展に初入選してから昨年で8年目となり新会友に推挙された事恐縮しています。思う様に窯の温度が上がらず今でも苦勞しますが、何事も続ける事の大切さを実感しています。

絵好きの集う店

カフェ北都館 ギャラリー

札幌市西区琴似1条3丁目1-14 第一病院向
TEL 011-643-5051

営業時間 水～日 AM 10:00～PM 7:00
火曜定休日 月 AM 10:00～PM 5:00

メールアドレス hokutokan@sa3.gyao.ne.jp
http://hokutokan.jimdo.com



ひ、ふ、み…は日本古来の「和語系数詞」。現代では十(とお)以上は漢語系数詞で数えるのが一般的だが、二十歳(はたち)、三十路(みそじ)、八百屋(やおや)など、日常的に使う単語にもその痕跡は残る。百は「もも」で、九十九(つくも)は次百(つぐもも)が転訛したもの。「百=たくさん」の意味から、果実を総称して「もも」と呼ぶようになったという説もある。

M55% Y19%

桃李もの言わざれども下自ずから蹊を成す

https://nakanishi-shuppan.co.jp



NAKANISHI PUBLISHING CO.,LTD.

since 1988

道展ニュース

No. 157 [2026年5月9日発行]

発行 ■ 北海道美術協会
編集 ■ 道展広報部
URL ■ https://doten.jp
デザイン ■ 笠井真紀子(中西印刷株式会社)
印刷 ■ 中西印刷株式会社

編集
後記

「リンゴを食べて感動したら歌手は歌い、画家は描く」という大学時代の先生の言葉が、今も心に残っています。一人一人が生きて感じたことが、そのまま表現につながるという、ごく素朴で大切な在り方だと感じています。つい最近、博物館・美術館の「収益ノルマ」をめぐるニュースが話題となり、大きな議論

を呼びました。人が感じたことを目に見えるかたちにする側面をもつ美術の営みを、すぐに役に立つかどうかだけで測ることは、慎重でありたいと強く感じています。ささやかではありますが、「道展」をはじめ、一人一人の感覚や思いを大切に作る場に関わり続けていけたらと思います。(H. F.)